

北海道中央ユーラシア研究会 第115回例会

**チェチェン・ナショナリズムから汎コーカサス・ジハード運動へ：  
イデオロギー移行はいつ、どのように起こったのか**  
**小野瑞絵**

(北海道大学大学院文学研究科博士課程)

日時：2014年7月31日(木) 16:00-18:20

場所：北海道大学スラブ研究センター4階小会議室 401

討論者：野田岳人(群馬大学准教授)

司会者：宇山智彦(北海道大学スラブ研究センター教授)

出席者：17名

<参加記>

討論者の野田氏からは、大きく2点の指摘がなされた。これは、分析の対象を「チェチェン」とするのか「北コーカサス」とするのか、報告者の研究の方向性を問うものであったと言える。前者に関して、野田氏は先行研究の分類に従い、チェチェンのイスラーム化を政治/法/社会の3つの側面に分け、相互の関連を世論調査結果等も紹介しながら解説を加えた。その上で、社会や政治指導者についての分析をより深める必要性を説いた。後者に関しては、特に1990年代のダゲスタンの状況について指摘したうえで、北コーカサス地域における汎イスラーム・ジハード運動の流れを、チェチェン以外の北コーカサス諸国におけるイスラーム運動の系譜から分析することの重要性が提起された。



参加者からは、カフカース首長国の「国家」像を問う声があった。チェチェン独立派においては民族国家を目標とし、マスハドフ政権下では「未承認国家」状態を解消すべく活動を展開していたが、首長国の目標や「境界」についての主張はどうか、また、イラク・シリア地域でカリフ国家を宣言した「イスラーム国」への反応は見られるかといった質問が出された。この他、国外からの支援といった外的要因の影響についての質問や、問題を抱えつつも一応の安定化を見せつつあるチェチェン共和国とカフカース首長国との関係を問う声もあった。

討論では「言説」というもののとらえ方・研究の手法について細心の注意が必要であるという重要な指摘が複数出され、今後の研究の課題となった。一方、本報告と討論から導かれた、北コーカサス全体を視野に入れたカフカース首長国研究の呼びかけは、大きな可能性を感じさせ、非常に興味深いものであった。

【記：立花優(北海道大学大学院文学研究科専門研究員)】